

茨木高校野球部

OB会報

発行

大阪府立茨木高校

野球部OB会

茨高野球部に感謝!

高校38回主将 森田 誠



この度は、歴史ある茨木高校野球部のOB会報の寄稿の機会を与えて下さいました。和田先生をはじめ、関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。大変光栄に存じております。

入社時の配属先が東京となり、その後、延べ13年にも及ぶ海外駐在も経験し、野球部を卒業してから数えると、30年強もの長い年月が経ちました。しかし、驚くべき事に、今でも当時の事を昨日の様に鮮明に覚えております。たつた2年半でしたが、強烈なインパクトがあったという事でしょう。

1983年の春に茨木高校に入学。5歳上の兄が茨高野球部であった事もあり、迷わず野球部に入部しました。小学校から一貫して野球に打ち込み、それなりに体格、体力的にも恵まれていた私は、兄から茨高野球部の事を事前に聞いてはいたものの、「所詮は、進学校の野球部。楽勝、楽勝!」と思っていました。ところが、実際入ってみると、特に三年生の先輩達は、自分が想像していたイメージをはるかに超える。オッサン

ぶり。加えて、めっちゃめっちゃ野球がうまい!とびつくりしました。同級生にも、自分より野球が上手な人間が複数おり、自分のおこりや甘さを反省すると共に、やる気や緊張感が湧いて来た事を覚えております。

入部時、自分含めて17名だった同期部員も、想像以上に厳しい練習もあつて、自分達の時代になった時には7名(十マナージャー)1名になっていました。

私は1967年生まれで、PL学園の清原桑田と同じ年。当時、高校野球は史上最強のPL学園を中心に、異常なまでの盛り上がりを見せていました。「打倒PL学園!」という事で、全体的なレベルは凄く高かったと思います。私たちが、生懸命努力した結果、練習試合では結構強く、最後の夏の大会前は、7連勝の負けなしで、期待感一杯で大会に臨みました。しかしながら、一回戦で、ベスト8まで進んだ東大津高校に、6対2であっけなく敗れてしまいました。

試合が終わった後は、それはもう悔しくて、しばらく涙が止まらず。恥ずかしい話ですが、人生の中で、3本の指に入るくらい泣き暮れました(泣いている姿がその日の朝日新聞の夕刊に載った程度です)。後日、「どうしてあそこまで泣けたのだろう?」と考えました。実は、「試合に負けた」という悔しさ、と言うよりは、「もう、この仲間と一緒に野球が出来ないんだ!」という寂しさと虚しさからでした。

勝利という、結果を追い求めて来ましたが、やはり、その勝利という結果や目標に向かって仲間と共に努力する、という「過程

IIプロセスこそ、重要なと感じています。このプロセスを通じて、組織におけるチームワーク、上下関係、ルール遵守、信賞必罰、他人への尊重等々、社会に於いて絶対的に必要な能力が身に付きます。その意味で、私は、茨高野球部の2年半で、その後の社会人としての基礎を学ばせてもらった事を大変感謝しております。

また、私は、有難い事に、主将をやらせて戴き、その流れて、大学時代には、茨高野球部の監督も2年経験させて戴きました。主将時代には、自分が如何なる精神状態にあるのかも、何事においても率先垂範して行動する事の大切さを学びました。そして、監督時代には、自分の未熟さもあり、公平!公正な選手起用の難しさ、選手への叱咤激励の難しさ等を経験しました。つまり、先に挙げた能力に加え、リーダーシップも学ばせて戴いたわけですが、今、その時の経験がとても役に立っています。

現役選手の皆さんに、お役に立てる様な気の利いたコメントはありませんが、どうか、今この素晴らしい瞬間を、一生の友と共に、思いっきり楽しんでほしい。心より、そう思っております。

部長より

高30回 和田 充司



OBの皆様におかれましてはますますご

健勝のことお喜び申し上げます。平素から茨木高校野球部にひとかたならぬご支援をいただき、ありがとうございます。このたびは鳥かこの補修のために多くのOBの皆様から寄付をいただいたことについてあらためてお礼を申し上げます。おかげさまで今までは見違えるようなバッティングケージに生まれ変わり部員の打撃練習にもいいそう熱がこもるようになりました。本当にありがとうございます。

さて、私自身は昨年夏で監督を退きましたが、この10ヶ月余り、後任の石丸新監督の献身的な指導にたえて、部員たちは皆が、体となつてよく練習し、明るく礼儀正しい、好いチームになりました。「勝たせてやりたい」と部長として見て、強いて強く思います。しかし大会は、秋も春も初戦はものにできたものの2勝目はならずという結果でした。夏はぜひこの壁を乗り越えて、好いチームというだけではなく強いチームへと姿を変えて欲しいと思っています。

御挨拶

監督 石丸 寛明



新緑の候、OB会の皆様におかれましては益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。平素より本校野球部の活動に格別のお力添えを賜り、厚く御礼申し上げます。また、この度は老朽化したバッティングケージ、いわゆる「とりかこ」の補修に関して、多数の寄付金を

いただきましたこと、重ねて御礼申し上げます。補修も無事完了し、立派なとりかこを活用して部員を日々練習励励をいたします。さて、昨夏の履正社戦を終えて始動した新チームより、監督として指導する機会をいただきました。私自身、チーム運営に関して手探りの部分も多く、十分な指導ができていなかろうか自信はありませんが、部長の和田先生のサポートのもと日々指導に当たっております。指導方針として「周囲から応援されるチームづくり」を掲げ、学業との両立や身土しなみ、挨拶や整理整頓等、野球の技術以外の指導にも重きを置いていきます。

チーム自体は主将の小田を中心に「公立校ナンパワーズ」を目指し、限られた時間、場所のなか、工夫して練習に取り組んでいます。昨秋の初戦は池 佐野の継投で英真学園を5対3で破るも、続く狭山戦では手も足も出ず、0対7のワールド負けを喫しました。冬の間は身体づくりと徹底的な振り込みを課題とし、春の練習試合では見違えるように鋭い打球を飛ばす選手も増えました。春季大会初戦では住吉商業を相手に11対0のワールドで勝利を収めました。続く大商大堺戦は3対12のワールド負けという悔しい結果に終わりました。強豪私立を相手に4回まで3対1とリードし、6回まで僅差のままゲームを展開できたことに、選手たちの成長を感じる、方、結局勝ちきることができないチームの現状を痛感しました。

「公立校ナンパワーズ」、当然ながら今のままでは到底達成できる目標ではありません。ただでさえ力のある公立校がひしめきあう北摂のなか、それらのチームにも勝る「球への執念、必死さ、泥臭さ」がなければ敵うはずもありません。部員たちが自ら拵えたい殻を破り、「必死のバッチ」で白球を追いかけられることを期待しつつ、彼らが野球を通して成長できるようにこれからも尽力して参ります。

末筆ながら、今後とも本校野球部をどうぞよろしくお願いたします。ぜひグラウンド、そして球場の方へも足をお運び下さい。お待ちしております。